

「華氏 451 度」 レイ・ブラッドベリ 著 (伊藤典夫 訳) ハヤカワ文庫 2014 年 4 月発行
(原著 : 『Fahrenheit 451』 Ray Bradbury 1953 年)

「華氏 (Fahrenheit ; °F)」は少々聞き慣れない言葉かもしれないが、これは温度の単位である。世界中のほとんどの国では「摂氏 (Celsius ; °C)」が温度の単位として使われているが、アメリカをはじめとする少数の国では、日常的に用いる温度の単位として「華氏」が採用されている。

摂氏 (°C) とは水の凝固点 0°C, 沸点を 100°C としたものに由来しているが、摂氏 (°C) と華氏 (°F) との間には、

$$[°C] = \frac{[°F] - 32}{1.8}$$

という関係式がある。(これを知っていれば、アメリカで天気予報を見た際にビックリしない程度に役立つかもしれない。) したがって、水の凝固点は華氏で表現すれば 32°F, 沸点は 212°F とわかる。では今話題にしている「華氏 451 度」とは摂氏 (°C) でいうところの何度なのかというと、これも上記の関係式に代入すればすぐにわかるが、約 233°C である。この温度が意味するものとは一体……。タイトルページにこう書いてある：

“華氏 451 度 —— この温度で書物の紙は引火し、そして燃える”

さて、物語のあらすじを話そう。舞台は 21 世紀中盤とおぼしきアメリカ。この世界では、本は忌むべきものとされており、所有することが禁じられている。主人公はモンターグという「ファイアーマン」。彼の仕事は、本を焼却すること。(通常われわれが想像する消防士としてのファイアーマンとは全く逆の仕事だ。) 彼ははじめ自分の職務に誇りを持っており忠実に仕事に励んでいたが、あるときから徐々にその仕事に疑いを持つようになり……。

ところで、この本は「読書が禁じられている社会は怖い」とか「やはり読書は大切だ」とか、そのような陳腐なことを言っているものではない。物語は表向き「読書が禁忌されている」世界を描いているのだが、実は禁忌されているのは「読書」ではないのだ。それは「思考すること」である。「なぜ？」と疑問を持つ態度である。

我々の現実の社会でも「考えなくなった」などと言われて久しい。世の中が高度化されるに従って、人々は「わかりやすいもの」「単純なもの」を好むようになってきている。そして、そういった大衆に迎合して何もかもが圧縮され、ダイジェスト化されてきている。ある現象に対して「なぜ起こるのか」を考えることよりも「どう起こるのか」という知識が優先される社会になりつつある。そうした現代の少し極端な社会を描いているのがこの小説の舞台なのである。この小説を 70 年も前に著したブラッドベリの慧眼に驚嘆する。我々が燃やしつつあるのは一体何なのか？そのような問いを持って読んでみてほしい。